ザンビアにおける生態人類学研究上の諸問題

—— 予備調査報告 ——

掛谷 誠*・市川光雄**

I. はじめに

私たちは、アフリカのウッドランド（乾燥疎開林）における生態人類学的研究の展開を意図して、新たにザンビア国をフィールドに定め、その調査研究の可能性を探るため、1982年7月から10月にかけて予備調査を実施した。日本の人類学者が、ザンビア国で本格的な調査を進めるのは初めての試みであり、調査対象や調査地域の選定と現状の把握、調査許可取得をはじめとする現地研究所・政府の外国調査隊の受入れに関する方針と実状の確認、および研究協力の可能性の打診などが予備調査の目的であった。

現地における外国人研究者の受入れ機関は、ローズ・リビングストーン研究所 (Rhodes-Livingstone Institute) のあとを受けついだザンビア大学アフリカ研究所 (Institute for African Studies) である。R. Serpell 所長や私たちのカウンター・パートであり、Technology and Industry Research Unit のコーディネーターをつとめる P. Hayward 博士をはじめとする研究所のスタッフは、温かく私たちを迎え入れ、積極的に私たちの計画を支持してくださった。そのおかげで、2カ月余りの予備調査はほぼ順調に進み、1983年度に予定している本調査の見通しを得ることができた。

この小論では、私たちが企画した「ウッドランド帯における生態人類学的研究」の重要性の指摘とその位置づけを簡単に記したあとで、予備調査の結果をふまえ、「ザンビアにおける自然と人」の概況と、本調査で予定している課題に関して、その現状と問題点の分析を試みたい。

II. ウッドランド研究の必要性

ウッドランドは、熱帯降雨林とサバンナ・半砂漠といった、極度の湿潤地帯と乾燥地帯の中間に位置するエコトーン帯（生態的推移帯）であり、アフリカ大陸のほぼ1/4を占めている。ウッドランドは、アフリカを代表する生態ゾーンの一つであり、きわめて特徴的な民族・文化を内包している。

ここ15年の間に、日本の研究者によって多くの生態人類学的研究が蓄積され、その対象地域はアフリカ大陸における主要な生態ゾーンのほとんどをカバーするにいたった。ウッドランドにおいても、タンザニア国の焼畑農耕民トングウェ族 (Kakeya, 1976; Takeda, 1976)、ザイール国の焼畑農耕民トゥンブウェ族 (松井, 1977) や狩猟採集民ムボテ族 (Terashima, 1980) の研究があるが、その蓄積はまだ浅く、とくに体系的な研究が欠如しているといわなければならない。アフリカ大陸を代表する生態ゾーンの一つであり、かつてホミニゼーション（ヒト化）の舞台となったと考えられるウッドランドのもつ、ヒトの居住域としてのポテンシャルを明らかにする努力がさらに積み重ねられなければならないゆえんである。

III. ザンビアの自然と人——その研究上の問題点——

1. 概要

<自然>

今回の予備調査では、レンタ・カーやローカル・バスを駆使してほぼ7,000kmを踏破したのであるが、それはいまさらながらザンビアがミオンボ・ウッドランドの国であることを再確認する旅であった。ジャケツイバラ亜科 (Caesalpinioideae) に含まれる *Brachystegia*, *Julbernardia*, *Iso-*

* 筑波大学環境科学研究科

** 京都大学理学部

berlinia の3属の樹木を主要樹種とするこの植生は、筆者の一人である掛谷が、西部タンザニアのトングウェ・ランドで見られたそれと全く同じものであった。

もちろん、75万 km^2 余りの広さを有する国土の植生は、その地形・地質(図1)や気候の特性、人為の影響の程度に応じて、図2に示したように、森林とウッドランドそれに草原・スワンプと多彩な内容を含んでいる。それぞれの植生タイプの特徴は、主要構成樹種を中心に表1にまとめた。

つぎに、ザンビアの地形(図1)と気候特性について簡単にまとめておきたい。

国土の大半は標高900 mから1,500 mの高原地帯に属している。雨量は北から南に向うに従って減少する傾向性を示すが、大部分は年間800～1,200 mmの降雨量帯に入る。この雨は、11月から

5月にかけての雨期に集中して降る。年間 は明瞭な三つのシーズンからなり、5月から8月初旬にかけての冷涼乾期、8月中旬から10月にかけての暑熱乾期、それに11月から5月まで続く雨期にわかれる。

<人>

ザンビアの人口は、1976年の国連推定によれば、514万人を数える。世界第2の銅産出国であるザンビアは、いわゆるコッパー・ベルトを中心に都市化の進展が著しい。地方の住民も近代化の波を受け、大きな変化の時代に生きてはいるが、今もなお伝統的な自給農耕に依存する人々も多い。

伝統的な部族分布(図3)は、Murdock(1959)の分類に従えば、北部にベンバ族(Bemba)をはじめとするCentral Bantu群が住み、南・西部にはイラ(Ila)、トンガ(Tonga)、ロジ(Lozi)

図1 ザンビアの地形概況
(Naidoo and Mumbwe, 1981: p.3 より引用)

図2 ザンビアの植生分布
(Davies, 1971 : p. 25より引用)

表1 ザンビアの植生タイプ

植 生 タ イ プ	主 要 構 成 樹 種	備 考
Forest		
Livunda Forest	<i>Chryptosepalum pseudotaxus</i> ('livunda')	常緑のロー・フォレスト カラハリ土壌に限定される落葉樹林 タンザニアのイティギ・シケットと共通
Mutemwa Forest	<i>Baikiaea plurijuga</i> , <i>Pterocarpus antunesii</i>	
Itigi Fore. Forest	<i>Bussea massaiensis</i> , <i>Baphia massaiensis</i> , <i>Combretum</i> spp.	
Woodland		
Mushibe Woodland	<i>Guibourtia colesperma</i> ('mushibe'), <i>Burkea africana</i>	カラハリ土壌に特有 ザンビアの代表的植生 ザンベン・ルアングワ峡谷に発達 高い草本類をともなった植生 より開けた草本性のウッドランド
Miombo Woodland	<i>Brachystegia</i> , <i>Julbernardia</i> , <i>Isoberlinia</i> spp.	
Mopane Woodland	<i>Colophospermum mopane</i> , <i>Kirkia accuminata</i> , <i>Sterculia</i> sp.	
Chipya Woodland	<i>Pterocarpus angolensis</i> , <i>Erythrophleum africana</i> , <i>Parinari curatellifolia</i>	
Lusese Woodland	<i>Burkea africana</i> , <i>Dialium engleanum</i> , <i>Baikiaea</i> spp.	
Grassland and Swamp		氾濫源およびスワンプに発達
Grassland and Swamp	<i>Loudesia</i> sp. <i>Hypparrhenia</i> sp. <i>Papyrus</i>	

(Naidoo and Mumbwe, 1969 ; Davies, 1971 ; Fanshawe, 1971 を参照して作成)

図3 ザンビアの部族分布
(Davies, 1971 : p. 35 より引用)

などの Middle Zambezi Bantu が住む。ともに農耕に基礎をおいた部族群であるが、前者はツエツエバエの分布域とも重なって牛飼養を営まなず、後者は牛飼養民であることが特徴的である。

これらの両パンツ―群は、アンゴラからザンビア、モザンビークにかけて中央アフリカを帯状に広がる、いわゆる母系地帯に属することで有名である。多くの部族は、ルンダ・ルバ王国からの移住民であることを物語る伝承をつたえている。伝統的な社会統合の様相は多様であるが、特にペンバ、ロジなどは一人のパラマウント・キングを擁する強大な王国を形成したことで知られている (Murdock, 1959 ; Roberts, 1976 ; Aldridge, 1978)。

一般的に、アフリカ民族学においては、言語や文化要素の共通性を指標として、ザンビアの諸部族民を、①フィパ族 (Fipa) グループ、②ペンバ族グループ、③イラ (Ila), トンガ族グループ、④ロジ族グループの四つに分けて論じることが多

く、Daryll Forde の編集した Ethnographic Survey of Africa シリーズでも、この類別に従って民族誌の概説書が出版されている (Willis, 1966 ; Whiteley, 1950 ; Jaspan, 1953 ; Turner, 1952)。

これらパンツ―諸族についての記載の中に、トゥワ (Twa) と呼ばれるピグミー系あるいはブッシュマン系に由来すると思われる種族について断片的な報告を見出すことができる。予備調査に際して、筆者らの関心の一つは、このトゥワ系の人々の所在とその実態を確認することにあった。この問題については次の章でとりあげることにしたい。

このような部族構成を反映して、ザンビアにおける言語状況も多彩である。それぞれの部族は固有の部族語を保持してはいるが、現在、国語として認められているのは、ペンバ、カオンデ (Kaonde), ロジ, ルンダ (Lunda), ルバレ (Luvale), ニャンジャ (Nyanja), トンガの7言語

と英語である。

以上、ザンビアにおける自然と人について概観した。現地踏査をふまえ、より具体的に生態人類学的な諸課題を検討する以下の章では、まずトゥワ問題をとりあげたあと、ハビタットと生業を組み合わせ、スワンプの漁撈民とウッドランドの農耕民に言及したい。

西部ザンビアに広がるザンベジ川上流のフラッド・プレーンに居住するロジ系の農牧民は、かつて有名な王国を形成した人々である。肥沃な氾濫源と王国という社会システムの関係は、生態人類学的にみても興味深い問題を多く含んでいるのであるが、当面の私たちの課題からはずれるので、ここでは省略したい。

2. トゥワ問題

多くの民族誌や部族分布図は、ザンビアにおけるピグミー系、ブッシュマン系の人々の存在を報告している。彼らはトゥワと呼ばれているが、例えば Langworthy (1971: p. 34) は次のように記載している。「興味深い部族グループであるトゥワは、中央および北ザンビアのカフエ・フラット (Kafue Flats) と、ルカンガ (Lukanga) やバングウェウル (Bangweulu) のスワンプに、大部分が生息している。遺伝的には、ブッシュマンとピグミーの中間形質を保持していると考えられており、バンツ語族の到来とともに、僻地に追いやられた。今日、トゥワはスワンプの漁場を共有する隣人たちの言語に強く影響されて、バンツ語を喋っている。」ザイル国 of イトゥリ・フォレストに住む狩猟民ムブティ・ピグミーを彷彿とさせる記述に、私たちは強い関心を抱いていたのである。

上記のトゥワの分布域のうち、私たちはルカンガおよびバングウェウルのスワンプを訪れた。きわめて短期日の調査であり、速断を避けなければならないが、形質的に明確なトゥワ・グループと判断される集団は、少なくとも現在は見出しがたく、むしろその生活様式や他部族民との関係に焦点を合わせて、トゥワ問題に接近すべきであると

いう結論を得た。

ルカンガ・スワンプは首都ルサカの北方に位置し、またコッパー・ベルトにも近く、ザンビアにおける重要な魚の供給地の一つである。これまでの民族誌によると (例えば Jaspan, 1953), この地域には少数のトゥワとともにレンジェ族 (Lenje) が土着し、また他地域から漁撈を目的とした移住者が多く住みついている。

スワンプにアプローチする拠点の一つであるワヤ (Waya) 周辺、ワヤからスワンプにわけ入る水路ぞい、およびスワンプの北東部にあるチルワ島 (Chilwa) を踏査したが、明瞭にトゥワと認められる人々は観察しえなかった。

人々に尋ねると「トゥワというのはブトゥワ (Butwa) のことで、土着の漁撈民のことだ」という答が返ってくる。どのような経緯がその背後にあるのかは別にして、ルカンガ地方ではレンジェ族などの漁撈を主生業あるいは専業とする土着の人々をブトゥワと呼んでいる。

ルアプラ州に位置するバングウェウル・スワンプ域の諸部族民について記した民族誌 (Whiteley, 1950) によれば、現在このスワンプ域の大半に分布するウंगा族 (Unga) が18世紀頃に到着する以前から、トゥワはこの地域に住みつており、1933年には少なくとも1,480人の人口が確認されているという。

筆者らは、スワンプの西端部を流れるルアプラ河岸を踏査し、近隣の農耕民などからトゥワの村と称されているヨンゴロ (Yongolo) およびムウェレラ (Mwelela) の両村を訪れた。両村の住民には、ピグミー的な形質特性を認めることができなかった。彼らは砂質土壌を盛り土にして小規模なキャッサバ畑を耕作してはいるが、漁撈を主生業とする人々であった。村人は自らをトゥワと称することはなく、隣接して住む農耕民であるカベンデ (Kabende) 名を名乗っている。トゥワは、「本格的な農耕を知らず漁撈に専門的に従事する遅れた人々」という意味内容を含みながら、周辺の他部族民から侮蔑の念をこめて称せられる部族名であった。

近年、カフエ・フラットにおけるトゥワについ

て論じた Lehmann (1977) は、小さな集落に散在して住んでいたトゥワが、植民地政府の圧力のもとで、イラ族のチーフの勢力下に組みこまれ、変容していった様相を推定している。ごく一部の集落に、ピグミー・ブッシュマン的形質を保持した集団が現在も存続していることが示唆されているが、カフェ・フラットでもその大半は消滅あるいは変容してしまったようである。

このように、今日、ザンビアにおいて明確なピグミー・ブッシュマン的身体形質をもったトゥワ集団を見い出すのは、きわめて困難であるといえるのであるが、生態人類学的観点からいえば、トゥワ問題は重要な課題を提示している。とくにバングウェウル・スワンプ域に住むトゥワに典型的に示されているのであるが、農耕に適さないハビタットで、強く自然に依存した漁撈を主生業とし、周辺の農耕民から蔑視されつつも彼らと共生関係を保持しつつ生活する集団が存続しているという事実である。

ハビタットと生業様式、それに隣接する他部族との関係といった諸点に注目すれば、狩猟・採集を生業とする点でザンビアのトゥワとは異なっているが、イトウリ・フォレストのムブティ・ピグミー(原子, 1977; 丹野, 1977; 市川, 1978, 1982), ルアンダとブルンディの山地帯に住むトゥワ(伊谷, 1961), ケニアのドロボー(市川, 1980; Ichikawa, 1980), ザイールのウッドランドに住むムボテ(Terashima, 1980)などと共通した特性を指摘することができる。つまり、アフリカ大陸の広範な地域にわたって、狩猟・漁撈——採集も加えて採取者(forager)と表現できる——といった強く自然に依存し、動物蛋白源を供給する生業を営む人々が存在し、主として農耕を営む部族民と生活域をすみわけつつ共生関係を保ち生活しているという事実である。それは、foragerという生態的地位(ecological niche)を設定し、耕作者(cultivator)という生態的地位との相互関係から、アフリカの地域社会の特性を捉えなおす必要があることを示しているのではないだろうか。

前述の論文の中で Lehmann は、トゥワの起源

について Tobias (1966) や Jeffreys (1951) の論を採用しつつ、①かつての狩猟採集民の残存説、②権力の追跡から逃れた人々や、逃げだした奴隷が奥地に住みついたとする説、③さらに近年の言語学的研究から示唆される説にもとづいて、パンツールの進出に先立って南下したスーダン系の言語をもった初期鉄器時代人の残存である可能性を検討し、これらの説を相補的にとらえ考えるべきだと主張している。

ここではトゥワの起源について十分に論ずることはできないが、少なくとも、forager・cultivatorという生態的地位をめぐる部族形成史という視点が有効性をもつことを主張しようと私たちは考えており、このような立場で、トゥワ研究を進めていきたい。

3. スワンプの漁撈民

今回の予備調査で、もっとも強く印象に残ったハビタットはスワンプであった。私たちは、上述のトゥワ調査との関連でルカンガとバングウェウルのスワンプを訪れたのであるが、ここではルカンガでの観察を中心に論述したい。

広大な沼沢地を縫うように走る水路には、その流れがゆるやかであることを示すように、スイレン(*Nymphaea* sp.)の花がそこそこに群生している。人々はカヤツリグサ属の植物(*Cyperus* spp.)やアシ(*Phragmites* sp.)などからできた浮き島(floating island)の上に、1~5戸の草葺きの家屋を設置して住み、漁撈活動に従事する。原則として男のみの生活集団である。今日では、刺網・小型地曳網による漁法が中心である。人々の生活用具は、漁具を除けば、カヌー・薪・トウモロコシの粉・調理道具それに寝具でほぼ尽きる。

他のスワンプ域でも同様であるが、他地域から来住して乾期に集中的に漁をし、雨期に入ると陸にあがる季節移住型の漁民と、前述したチルワ島などに住むレンジ族の人々を中心とした定着型漁民の2型を認めることができる。

主食用のトウモロコシの粉と薪を購入しなければならない漁民は、魚を売ることによって生活を成り立たせているのであるが、その販売法にはか

なりのバラエティがある。生魚で売る場合もあれば、乾燥魚を一定量蓄積してから売る場合もある。商人が船でやってきて買いつけることもあれば、漁民自らがワヤの港まで、あるいは都市域まで運搬して販売することもある。商人にも、都市から車でやってきて大規模に買いつける者もあれば、小規模な取り引きをする単独の女性の場合もある。

生魚は、主としてコッパー・ベルトからやってくる商人に売り渡す。筆者らは、一日、このような商人の船に同乗して、スワンプ内を回遊した。朝7時15分にワヤを出発し、昼の12時20分に帰港するまでの間に、商人は出会ったカヌーの漁民や立寄った浮き島に住む漁民と個別に交渉して、生魚を買いつける。この日の取引総額は351クワチャ(約9万5千円)であった。商人は、これらの生魚を持参した氷とオガクズで覆い、その日の内にコッパー・ベルトまで車で運搬する。

スワンプの漁民の生態はそれ自体、これまで私たちが研究対象とすることがなかった特異な環境への適応様式を示すものとして、生態人類学的に解明しなければならない。同時に、トゥワ問題で論じたように、マージナルな生態的地位の特性調査は、アフリカ大陸におけるforagerとcultivatorの相互関係とその進化という重要な問題に光を投げかける可能性を秘めている。また、スワンプにおける漁撈は不可避免的に現金経済化にまきこまれる強い契機を内包しており、市場システムをどのように形成し、それによって漁撈活動がいかに変容してゆくかという、きわめて現代的な課題も提起している。それは、市場経済にまきこまれつつ近代化の道を歩み始めたアフリカの地域社会の実態を、ビビッドに映し出す研究テーマとなろう。

私たちは、他の研究課題や地域との有機的な関連づけから、バングウェウル・スワンプのトゥワおよびウンガ族に焦点を定めて、調査を進めたいと考えている。バングウェウル地域では、舟の上から叩き棒で水面を打ち、魚を網に追いこむクトゥンプラ(kutumpula)漁など、ルカンガとは異った漁法もあり、またトゥワのように河川沿いに住んで漁撈に従事する人々や、浮き島に陣どる漁民、それに島に住む漁民もあり、ルカンガと共通

した側面をもちつつも、独自の漁撈世界を展開している。そのインテンシブな調査は、興味ある成果を生み出してくれるであろう。

4. ウッドランドの農耕民

広大なザンビアのウッドランドに住む人々の伝統的な主生業は、チテメネ・システム(citemene system)と呼ばれる焼畑農耕である。¹⁾ このシステムは、いくつかのバラエティを含んでいるが、大まかにいって小サークル・チテメネと大サークル・チテメネの二つのタイプに分けられる(Allan, 1965)。ザンビアの農耕システムを生態学的に分析したTrapnell(1953)は、前者を南部チテメネ、後者を北部チテメネと呼んでいる。

小サークル・チテメネは、固い大木を除いて、すべての木をほぼ胸の高さに伐り倒し、それらの木や枝や葉を直径6~9mの円状に積み上げ、雨期の直前に火を放って焼畑とする。ララ族(Lala)やビサ族(Bisa)など、南部ザンビアに住む人々の間で一般的な耕作法である。

大サークル・チテメネは、ベンバ族の居住域を中心とする北部ザンビアに広がっており、人々は原則として木を伐り倒さず、木にのぼって枝を伐り払い、それらの枝や葉を耕地に集める。枝を集める範囲は、耕地の広さの5~20倍にも達するという。

コンゴ・ザンベジ川流域に限定して発達したチテメネ・システムは、土壌が貧栄養で土地生産性が低いとされるウッドランドへの適応形態であると考えられるが(Allan, 1965)、一般的に言って、それは稀薄な人口密度と広大な樹林帯を前提とした農法であると言ってよいであろう。

筆者らは、小サークル・チテメネをカオンデ族・ララ族の居住域で、大サークル・チテメネをベンバ族の居住域で観察した。カオンデ族の小サークル・チテメネは、高く盛りあがった白アリ塚のある場所が特異的に選択されており、その周囲に伐採した樹木が円周状に積みあげられ、火を放たれた焼畑であった。ベンバ族の大サークル・システムは、枝を払われて林立する樹林の中にあった。ともに、ウッドランドで練りあげられた農法

であることを強く印象づけられた。一見粗放に見える焼畑農法であるが、植生や土壌の選択などに、伝統的なウッドランド農民のエスノサイエンスに裏うちされた、細やかな配慮と努力を読みとることができる。

ザンビアのウッドランドにおける農耕のもう一つの特徴は、アフリカ大陸固有の雑穀栽培が、今も脈々と受けつがれている点にある。もちろん他地域と同様に、キャッサバやトウモロコシなどの新大陸起源の作物も広く栽培されているが、とくに都市域から離れた地方では、シコクビエ・ソルガム・トウジンビエなどの雑穀栽培が重要な位置を占めている。

筆者の一人である掛谷は、西部タンザニアのウッドランドに住む焼畑農耕民トングウェの調査を続けてきたが、彼らはウッドランドを農耕の対象とはせず、比較的良好に発達した河辺林を焼畑耕地として選択し、トウモロコシ・キャッサバを主要作物として植えつける農法を営んでいた。このように、ウッドランドには、多様な適応様式と文化伝統が存在しているのである。比較研究の視座から、ザンビアに展開する、チメネ・システムと雑穀栽培が組み合わされた農耕様式の特徴を明らかにすることが、本調査の重要な課題の一つとなる。

このような農耕によって支えられてきた伝統的社会システムは、基本的に母系制社会であるという共通の特質をもつが、一方でカオンデ族のように分散した居住様式をもつ小規模な首長制社会から、ベンバ族のように一人のパラマウント・キングを擁する王国まで、多様である。ベンバ王国は、アラブ人との交易に基礎を置いていたといわれるが、それを可能にした生業や社会・文化がどのような構造特性をもっていたのか、そしてそれらの特性が現代にいかに関わりつがれているかという問題は、ウッドランドにおける自然と社会の関係というテーマのもとでの比較研究に、新たな視角を提示しうるであろう。

これまで、ウッドランドの農耕民社会の伝統的側面に注目して述べてきたが、このような特性をもった伝統社会が、現在、近代化の波をかぶらな

がら大きく変容しつつある状況にも注目しなければならない。前述したように、稀薄な人口密度と広大な樹林地帯、それに自給的生業などの諸条件を前提として、自然環境との間にバランスを保ち得ていた伝統的農耕民社会は、近代化による人口圧・経済圧それに経済発展を目指す国家政策などの影響を強く受け、農地の規模拡大や休閑期間の短縮などによって、森林荒廃や土壌の疲弊化という深刻な環境問題に直面している。都市に近いウッドランド帯では、都市の燃料源として不可欠な木炭生産の増大もあって、森林荒廃が著しい。農地の大規模化が進展する一方で、僻村では、コッパー・ベルトなどへの出稼ぎのため男性の基幹労働力に欠け、安定した農耕を維持できなくなるといふ現象もある。かつては狩猟によって確保されていた動物性蛋白も、野生動物の減少や禁猟政策もあって、安定した供給源をなくし、慢性的な蛋白欠乏症の現出という事態をまねいている（アフリカ研究所、P. Hayward 博士説）。上述した青年男子の出稼ぎは、また、婚資労働を伴った伝統的な婚姻制度の存続をあやうくし、キリスト教の浸透やさまざまな近代化要因もあいまって、母系制を含めた伝統的秩序は大きな変容を受けつつある（Whiteley, 1950; Schneider, 1981）。

環境問題の深刻化を重視した政府は、森林保護のキャンペーンやその適性利用の指導に力を注ぎ、パイロット・ファームや長期農業振興政策の策定などによって、農業の近代化をはかろうとしている。しかし、例えば、ベンバ・ランドの中心地であるカサマ周辺域では、常畑化した耕地に化学肥料を投入し近代的農業に従事してきた農民が、土壌や肥料の流出のために採算が合わず、チメネ農耕に回帰する現象もみられるという（ザンビア大学地理学科、S. H. Phiri 博士談）。伝統と近代化という現代アフリカが抱える相克は、ザンビアでもさまざまな問題を生みだしているのである。

私たちは、主としてベンバ族を対象にしてザンビアのウッドランドに住む農耕民の特性を探る生態人類学的研究を計画しているが、それは変化のただ中にある現代のアフリカ農民が抱える問題の根源にも切りこみうる研究でなければならないと

考えている。

Ⅳ. ローズ・リビングストン研究所の遺産

ザンビアで人類学的な調査研究を計画する者には、かつてのローズ・リビングストン研究所が残した膨大な研究業績をどのようにふまえるかという課題がある。その研究は、ザンビア全土にわたり、きわめて良質な民族誌とともに、理論的にも多彩な成果が蓄積されているのである。例えば、ロジ王国に関するグラックマンの研究 (Gluckman, 1941 など)、ンデンブー (Ndembu) に関するターナーの研究 (Turner, 1957, 1967 など)、ベンバに関するリチャーズの研究 (Richards, 1939 など)、グウェンベ・トンガに関するスカッダーの研究 (Scudder, 1962) 等々、枚挙にいとまがない。それぞれは、一般の民族誌的研究であると同時に、アフリカ王国論や葛藤理論の古典 (グラックマン)、象徴論の最先端を切りひらいた研究 (ターナー)、生態人類学の先駆的な業績 (リチャーズ、スカッダー) でもある。

1983年に着手する本調査において、私たちはバングウェウル・スワンプの漁撈民と、北部州のベンバ族およびそれに関連する農耕民を研究対象とする予定でいるが、これらの諸族については、ブレルスフォード (Brelsford, 1946) や、前述したリチャーズの業績がある。また、ザンビアにおける農耕システムの体系的研究として、今や古典となったトラップネル (Trapnell, 1953 など) の著作や、その前文をグラックマンが執筆しており、人類学的にもすぐれた業績といえるアラン (Allan, 1965) の研究書がある。

これまでの論述の過程で示唆したように、私たちは変容しつつある現代アフリカの様相を、生態人類学的な視点から捉えることを一つの目的としている。この立場に立つなら、主として1930～1940年代の部族社会の実態を把握した良質の民族誌の存在は、変化の原点をおさえるという点でも、積極的な意味をもってくる。

Ⅴ. 「変化」を正面にすえた研究 —むすびにかえて—

ウッドランドにおける生態人類学的研究の展開を意図して、新たにザンビアにフィールドを求めた私たちは、ハビタットと生業の組み合わせでいえば、トゥワを含むスワンプの漁撈民、およびウッドランドの農耕民の研究に焦点をあわせることになった。²⁾

この研究は、あくまでもウッドランドを舞台にしたヒトの適応と進化のあとをたどるという基礎的テーマにそったものであるが、同時に、大きく変容する現代アフリカをも視野に入れ、いわば「変化」を正面に据えた調査として展開されるはずである。変化する相と不変の相を識別しつつ、自然・社会・文化の相互関係に留意したダイナミズムを捉えうる生態人類学的研究の模索であるといってもよい。それは、「変化」の中にみえ隠れする対象社会の本質を見据えるという方法意識であるとともに、伝統と近代化の狭間で相克している地域社会の将来を展望するために、いささかでも役立つ基礎資料を提供できればという、私たちのひそやかな願望のあらわれでもある。

各方面からの御助言と御批判をたまわりたい。

謝 辞

本稿のもととなった予備調査は、1982年度文部省科学研究費補助金 (海外学術調査) を得て実施された。

序にも記したように、ザンビア大学アフリカ研究所の R. Serpell 所長と P. Hayward 博士には大変にお世話になった。在ザンビア日本国大使館、JOCV ルサカ事務局の中垣長睦氏と後藤俊男氏、三菱商事ルサカ事務所の吉村省三氏と曾宮強氏からは、適切な御助言と多大の御助力をたまわった。記して謝意を表したい。

注

- 1) チテメネ・システムについては、矢内原 (1980) が簡潔に紹介している。
- 2) 本調査では、比較の意味もあって、ザイールのウッドランドに住む狩猟採集民ムボテとザイール川の漁撈民をも含める。

引用文献

- Aldridge, S.: *The Peoples of Zambia*, National Educational Company of Zambia Ltd., Lusaka, 1978.
- Allan, W.: *The African Husbandman*, Oliver & Boyd, Edinburgh, London, 1965.
- Brelsford, M. V.: *Fisherman of the Bangweulu Swamps*, Rhodes-Livingstone Inst. Occasional Papers, Vol. 12, 1946.
- Davies, D. H.: *Zambia in Maps*, Univ. of London Press Ltd., London, 1971.
- Fansawe, D. B.: *The Vegetation of Zambia*, Ministry of Rural Development, Forest Research Bulletin No. 7, Government Printer, Lusaka, 1971.
- Gluckman, M.: *Economy of the Central Barotse Plain*, Rhodes-Livingstone Papers, No. 7, Livingstone, 1941.
- 原子令三: 「ムブティ・ピグミーの生態人類学的研究」, 伊谷純一郎・原子令三編『人類の自然誌』雄山閣, 東京, 1977.
- 市川光雄: 「ムブティ・ピグミーの居住集団」『季刊人類学』9巻1号, 1978.
- : 「東アフリカ Suiei Dorobo の養蜂」『季刊人類学』11巻2号, 1980.
- : 『森の狩猟民』人文書院, 京都, 1982.
- Ichikawa, M.: The Utilization of Wild Food Plants by the Suiei Dorobo in Northern Kenya, *Journal of the Anthropological Society of Nippon*, Vol. 88, No. 1, 1980.
- 伊谷純一郎: 『ゴリラとピグミーの森』岩波書店, 東京, 1961.
- Jaspan, M. A.: *The Ila-Tonga Peoples of North-Western Rhodesia*, Hazell, Watson & Viney Ltd., London and Aylesburg, 1953.
- Jeffreys, M. D. N.: The Batwa: Who are they? *Africa*, Vol. 23, 1953.
- Takeya, M.: Subsistence Ecology of the Tongwe, Tanzania, *Kyoto University African Studies*, Vol. 10, 1976.
- Langworthy, H. W.: Language and Tribes, Davies D. H. (ed.), *Zambia in Maps*, Univ. of London Press Ltd., London, 1971.
- Lehmann, D.: The Twa: People of the Kafue Flats, *Development & Ecology in the Lower Kafue Basin in the Nineteen Seventies*, Williams, G. J. and Howard, G. W. (eds.) Papers from the Kafue Basin Research Committee of the University of Zambia, Lusaka, 1977.
- 松井 健: 「トゥンプウェ族の民族動物学 — エコロジーとエピステモロジーの間で —」伊谷純一郎・原子令三編『人類の自然誌』雄山閣, 東京, 1977.
- Murdock, G. P.: *Africa*, McGraw-Hill, New York, London, Toronto, 1959.
- Naidoo, M. R. and M. Mumbwe: *A Secondary Geography of Zambia*, Monterey Printing and Packaging Ltd., Ndola, 1969.
- Richards, A. I.: *Land, Labour and Diet in Northern Rhodesia*, Oxford Univ. Press, Oxford, 1939.
- Roberts, A.: *A History of Zambia*, Richard Clay (The Chaucer Press) Ltd., Bungay, Suffolk, 1976.
- Schneider, H. K.: *The Africans*, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, New Jersey, 1981.
- Scudder, T.: *Kariba Studies*, Vol. 2: *The Ecology of the Gwembe Tonga*, Manchester Univ. Press, Manchester, 1962.
- 丹野 正: ムブティ族ネット・ハンターの狩猟活動とバンドの構成, 伊谷純一郎・原子令三編『人類の自然誌』雄山閣, 東京, 1977.
- Takeda, J.: An Ecological Study of the Honey-collecting Activities of the Tongwe, Western Tanzania, East Africa, *Kyoto University African Studies*, Vol. 10, 1976.
- Terashima, H.: Hunting Life of the Bambote—An Anthropological Study of Hunter—Gatherers in a Wooded Savanna, *Senri Ethnological Studies*, Vol. 6, 1980.
- Tobias, P. V.: The Peoples of Africa South of the Sahara, P. T. & Weiner, J. S. (eds.), *The Biology of Human Adaptability*, Clarendon Press, Oxford, 1966.
- Trapnell, C. G.: *The Soils, Vegetation and Agriculture of North-Eastern Rhodesia*, Government Printer, Lusaka, 1953.
- Turner, V. W.: *The Lozi Peoples of North-Western Rhodesia*, Hazell, Watson & Viney Ltd., London and Aylesburg, 1952.
- : *Schism and Continuity in an African Society: A Study of Ndembu Village Life*, Manchester Univ. Press, Manchester, 1957.
- : *The Forest of Symbols*, Cornell Univ. Press, Ithaca and London, 1967.
- 矢内原 勝: 『アフリカの経済とその発展』文真堂, 東京, 1980.
- Whiteley, W.: *Bemba and Related People's of Northern Rhodesia*, International African Institute, London, 1950.
- Willis, R. G.: *The Fipa and Related Peoples of South-West Tanzania and North-East Zambia*, Sydney Press, Bedford, 1966.

Problems in the Study of Ecological Anthropology in Zambia: A Preliminary Report

Makoto Kakeya and Mitsuo Ichikawa

A preliminary survey in Zambia from July to October, 1982, has revealed that the followings are important topics in the study of ecological anthropology in Zambia:

1) The Twa Problem

There are several fishermen groups called the Twa in the swamps in Zambia. Earlier researchers took them for the aboriginal inhabitants of a Bushman or Pygmy type. They have formed a symbiotic relationship with the neighboring cultivators and have come to occupy their own niche in the local ecological system. It is necessary to view the ethno-history of the Twa as a reflection of the differentiating process of their ecological niche. Similar kinds of symbiotic relationship between foragers and cultivators are found in various parts of Africa.

2) Fishing life in the swamp

Although the swamp or floodplain represents one of the typical environments in Zambia, the ecology of human life in such an environment has been little studied. The fishermen in the Bangweulu and Lkanga swamps, setting their camps on the floating islands, lead peculiar fishing lives adapted to the swamp environment, especially to the seasonal changes in the water level. The man-nature relationships in the swamp ecosystem are of great interest.

3) Agricultural system in the woodland

The cultivators in Zambia have developed a unique system of slash-and-burn agriculture called "citimene" system. This involves extensive utilization of the environment and is an adaptive means of living in the sparsely inhabited woodland areas. This traditional agricultural system has been seriously changed because of the population growth, introduction of cash crops, intensification of cultivation and other modernization processes. These changes and their effects on the local ecosystem should be studied in detail.

These topics are planned to be dealt with in the research conducted from 1983 to 1986.